

(二十) 承前

「言えぬな」

播磨法師は、唇を閉じた。

すると、その唇は皺の間に隠れて、どこが皺やら口やら、わからなくなった。

「播磨法師どの……」

口を開いたのは、土平であった。

「この件では、すでに、ふたりの人死にが出ております。このあたしも、遊齋の旦那も、人犬に襲われて、危ねえところでござりました——」

「危ない？」

ぎろり、と、播磨法師が、黄色い目玉を動かして土平を見た。

「この遊齋が、さむらい憑きにやられるタマかよ……」

視線を次に遊齋に向け、

「なあ」

そう言った。

遊齋は、どこか困ったような含みのある微笑を浮かべ、

「とりあえずは、このように生きておりますが……」

播磨法師に向かってうなずいてみせた。

「酒を馳走ちそうになつておきながら、何も言えぬというのもすまぬが、それ故ゆゑ、教えたとは言うた。誰に教えたかは言えぬ。それが、我が矜持きんぢぞ——」

「はら」

「この件で、人が何人死のうが生きようが、おれの知らぬところじゃ。おれが、この法を教えなかつたところで、いづれ、別のことで同じ数の死人は出よう。人の怨みうらみのことまでは、おれは面倒は見きれぬ故、な——」

「——」

「そういう輩やからは、大神法を教えられずとも、いづれは刃物を使うことになるであらうさ。刃物はこの世から失なくせるか。刃物がないなら、毒薬でも使うかよ。人の世とは、そういうものじゃ。人のことに関わるな、遊齋……」

言われて、遊齋は、まだ困つたような微笑を浮かべている。

「我らは、人外にんがひの者ぞ。ものけと同類じゃ。人の世では、息をひそめ、闇やみの中に寝起きして、その闇から出ようとなどずるものではない……」

ふう……

と、小さく遊齋は溜め息をつく。

「去いね……」

そうつぶやいて、播磨法師は眼を閉じた。

すると、皺の中に埋もれ、眼の在りあかもわからなくなった。

静かな寝息が聞こえてきた。

何か言おうとする土平を、遊齋が手で制して、静かに首を左右に振った。遊齋と土平が、ゆつくりと立ちあがった。

みしり、

みしり、

という、床を踏むふたりの足音が遠くなり、やがて、何も聴こえなくなった。

## (二十一)

いつの間にか、暗くなっていた。

その闇の中で、まだ播磨法師は眠っている。

遊齋たちが去った後と、ほとんど姿勢が変わっていない。

夜になって、温度が下がっている。

寒いはずなのだが、播磨法師は身じろぎもしない。

脛<sup>すね</sup>をむき出しにしたままだ。

どれほどの時が過ぎたか――

かっ、

と、播磨法師が黄色い眼を開いた。

二間半ほど先の空間に、青い火の玉が三つ、浮いていたのである。

ゆらり、ゆらりと、風に揺れる炎のように、その火の玉が動いている。

皺が、きゆうつと動いて、その皺の割れ目から茶色い歯が覗いた。  
口の左端を吊りあげて、笑みを浮かべたのである。

「やめとけ、おれに関わるな……」

播磨法師は言った。

誰に向かって声をかけたのか。

何ものかが、闇の奥に潜んでいる——播磨法師はそれをわかっているらしい。

その火の玉は、上下、左右にゆるゆると揺れている。

と——

ふいに、その火の玉が動いた。

播磨法師に向かって、三つの火の玉が、飛んできたのである。

飛んできた火の玉のひとつを、播磨法師は、左手で受けた。

火の玉の前に、左掌を向けて、飛んでくるのを防いだのである。

播磨法師の左掌の二寸先で、火の玉は止まっていた。

もうひとつの火の玉を、播磨法師は同様に右掌で受けていた。

三つ目の火の玉は、斜め上から襲ってきた。

その火の玉に向かって、播磨法師は、

「ふっ」

と、息を吹きかけた。

その火の玉が、播磨法師の顔の、三寸手前で止まっていた。

「何の真似じゃ」

播磨法師が、闇に向かってつぶやく。

「喝かつっ」

播磨法師が、鋭く声を発すると、

ぼっ、

ぼっ、

ぼっ、

と、音をたてて、三つの火の玉が消滅した。

「暗火魂あんかたま、おれにはきかぬぞ……」

闇の奥からは、どういう物音も、声も、届いてこない。

しばらく、播磨法師は、闇の奥を睨にらんでいたが、やがて、

ほ、

と、小さく息を吐いた。

「去んだか……」

播磨法師は、低い声でつぶやいた。

さっきの笑みが、まだ、その口元にへばりついていた。

凄すどい笑みであった。

( つづく )